

2022年 10月

課題本 『パンデミック

(世界をゆるがした新型コロナウイルス)』

◆◆◆10月の読書会から

『パンデミック』を読んで語り合いました。今月は読むのに苦勞する参加者が多く、感想を言う前に「今月の本は読めました？」という会話も聞こえてきました。難解な内容の本でどうなることか心配していました。

ところが「三人寄れば文殊の知恵」ではありませんが、課題本を頑張って読んできた人、作者の職業や出身から興味深い考察を出してくれる人、関連本を探した人などみんながそれぞれの思いを出し合い、様々なヒントをもらえました。まさに読書会の醍醐味です。

今月の極めつけは、講師の吉川先生からも今月の課題本のような分類番号 139「哲学」に該当する本の読み方を教えていただいたことです。文学作品ではない課題本でしたが、参加者は新たに読める分野、読みたい分野が増えた会になったのではないのでしょうか。実際に『パンデミック2』に繋がっている人もいます。

今月は参加者も増えて、読書会にまた新たな風が吹き込んでくる予感がします。

(文責:世話係)

読書会を終えて

講師 吉川五百枝

図書館が付けられたこの本のラベルは、139 の分類です。「哲学」に該当するので、自分がどんな感想を持つかという前に、まず、著者の言いたいことを聴きました。

序章

ヘーゲルは、歴史から我々が学べることは、歴史から我々は何も学ばないということだけだと言った。だから、私もこの感染拡大が我々を賢くするとは思わない。もう平常への復帰はない。我々の制度の一体何が間違っていたのか。

第1章

健全な社会には複数の声があるべきだ。一般の人々と国家の間の相互信頼が重要で、感染流行の際には、強固な国家が必要である。生産と流通の調整を市場という座標の外で行わなければならない事態が起きる。

コロナウイルスは、神がその英知によって創りたもうた唯やみくもに自己複製し、突然変異する馬鹿げたウイルスだ。グローバル化や資本主義市場、富者の驕りなどの社会的条件によるのではなく、自然の偶然性の結果でただ発生した。深い意味などない。「xxファースト」の旗

印は降ろさなければならない。〈みな同じ舟に乗っている〉

第2章

流行拡大で、過重労働の人達と自宅にこもり何もやることがない人達との対照的な存在が生まれた。〈誰もが自らの企業の自己搾取する労働者である〉と言えるが、トップ経営者と家で過ごす不安定な労働者の間は分断されている。階級の区分が新しい側面を見せるが、それらの疲労には違いがある。

第3章

欧州の上空に究極の壊滅的出来事が3つ重なる。1, コロナウイルス流行の隔離と苦痛と死と経済的影響。2, 輸出入に依存している影響が大きい。3, シリアでの暴力(トルコとアサド政権が政治的利益を得るために避難民の苦が生じる。エルドアンとプーチンの悪魔の躍り「プートガン」だ)感染がもたらす恐怖を利用した軍事目的追求。この危機の良かった事は、世界の協力の必要性がひしひしと感じられたこと。感染と難民が結びつけられれば、差別主義者の思うつぼだろう。第三世界の貧困層難民流入への対応が寛容と連帯を基本にするとしても、現実的な難しさは、時を待たない。

第4章

感染症拡大による2つのきっかけ。1, 隔離しろという圧力、フェイクニュース、妄想的陰謀論、人種差別の爆発、2, 民族国家を越えた社会、世界的な連帯と協力で実現する社会について考える事。根本的变化が必要だというシグナルだと捉える。

WHO世界保健機構が世界的な協調のモデルである。世界的ヘルスケア・ネットワークの構築を始めよ。破局的事態の前に世界の強調を。必要に応じて、経済を管理・規制でき国民国家の主権さえも制限できる一種の世界的な組織だ。自由主義的価値が危機にさらされている理由を真剣に考え、根本的な変化だけがその価値を救えると気がついた自由主義者を共産主義者という。古いスタイルの共産主義者ではなく。

第5章

感染拡大への反応は、キューブラー・ロスの五段階(否認, 怒り, 取引, 抑鬱, 受容)に模して考えられる。五番目の「受容」は究極の不確実性と無意味さを再認識させる。人類も、その終焉に加担しているのだ。

第6章

予期しない肯定的副作用は、ダブルスタンダードに対する一般市民の激しい怒りだ。

第7章

トイレットペーパー獲得では起きても、新しい未知の病気の流行の情報はパニックを起こさない。パニックは、立ち向かう正しい方法では無い。愛国主義ポピュリズムの限界を知るべきだ。世界的協調や連帯が1人1人の生き残りの利益にかなう。直面している選択は、野蛮か、ある種の再考案された共産主義か。

第8章

イタリア全土のロックダウン＝全体主義者の最も野蛮な願望が実現したようなもの。

緊急時の措置は政府の行政命令で我々の自由制限もある。恐怖による集団パニック状態から、新しい形の地域や世界の連帯に向かう。別のもっと繊細な語彙が必要だ。本当の哲学的革命が必要。人の精神は一種のウイルスである。〈人は感染した脳を持つヒト科の動物

で、膨大な数の文化的共生生物の宿主である。それを可能にするのが言語と呼ばれる共生のシステムである)。

第9章

人の顔をした野蛮＝社会倫理の基礎を失う。高齢者弱者のケア切り捨てや適者生存に見る野蛮。ナチの戦略に通じる。(ウイルスに感染しやすい居住地を作り続けながら新しいウイルス感染に驚く)。医療、経済、心理的という3つの危機に巻き込まれている。乗り切る方法は一種の「共産主義」だ。危機においては我々は社会主義者だが、相互扶助の共同体は危機が去ると瓦解し、その後「惨事便乗型資本主義」になるのか。

第10章

野蛮へ回帰するのか。(国家の法律に「従え、しかし考えよ。思考の自由を維持せよ」) 明るい未来の展望ではなく「災害資本主義」に対する解毒剤としての「災害共産主義」の視点の出番だ。新しい社会的連帯の契機がある。社会が生き残るためのコミュニズム(共産主義)だ。

【感想】著者の主張は多角的な理論の積み上げで、例会用にパラパラ読んだのでは、到底まとめられません。たしかに、「コロナ禍は、市場原理、利潤追求の限界を暴く」ことになりました。そこに登場するのが「新しい共産主義」という著者の主張です。いみじくも、文中にある「もっと繊細な語彙が必要だ」という言葉をそのまま私も感じます。「古いスタイルの」共産主義、とか「一種の」共産主義とかではなく。

「みな同じ船に乗っている」といわれますが、我が正義を決断するときは、みな、地球という同じ船に乗っている気はないのかもしれない。

『パンデミック』を読んで

◆【YA】

COVID-19 この記号を聞いたり、ニュースの見出しに出してから、もう既に3年が過ぎようとしている。著者ジジエックはCOVID-19が世界的に流行し始めて、執筆し20年の7月に日本語訳で出版されている。未だ今現在も終息が見えないのだから、正にその渦中の本だ。内容はなかなかむずかしく、理解しにくい本だ。

このウイルスが人でもなく、物でもなく目に見えぬ相手であるため、人々を社会的、経済的、文化的苦境に追いつめ、それらをどのように乗り越えていくべきかが問われている。日本で起きたことだけをかんがえても大変な世の中になった。医療体制が逼迫し感染-陽性-療養-最悪の場合は死へと進む患者のパニック感情は、想像を絶するものがある。ヨーロッパやアメリカではトリアージ的な処置がとられたとも言われた。又中国のような共産独裁的な国では完全な都市のロックダウンがしかれ、ヨーロッパでは地域的な封鎖でも国民の抗議が起こり、ウイルスに対する処置の違いが、明らかに出た。

隔離と生存を可能にするには、基本的に公共サービスが機能し続ける必要、即ち電気、水道、食糧、医薬品が危機に於いては最重要である。また政治は物的になるべき、即ち価値や信念ではなく、物や問題を中心に展開すべきだと。

先生の話で新しい共産主義の模索と言う言葉があったかと思う。
著者がこのパンデミックの中、我々はみな同じ舟に乗っているのだ。共通の脅威のまえに、資本主義にしがみつくのでも国家間対立でもなく、世界的な連帯が必要であると述べている。COVID-19 は私達に何を問い、警告しているのかと思う。日本でも沢山の人が、亡くなり、人生が狂い、生活の糧を奪われた。少なくとも生活の分断は起きた。
目に見えぬ脅威の前では先ず、国の徹底的な生活の糧の確保や世界の国々との連帯が必要とされる。これからも起きるだろうパンデミック、その時に備えての社会的連帯が力を発揮すると思う。

読書会の今回の課題本、今現在起きている世界の直面している問題、考えさせられるものだった。

◆ 【 TK 】

一年に一回はこんな本に必ず出会う。全く寄せ付けないちんぷんかんぷん。休んでしまおうか？本当に忙しく苦しい私。でもまあ、学べるものが一つはあるかもと出席しました。

案の定、ほとんどの人が私と同じ感想でした。でも何回も読んだり次のシリーズも読んでみたり努力した方に感心いたしました。

まずこの本の冒頭に聖書の言葉があり興味を感じました。しかし、イエスってこんなことおっしゃった？とびっくりでした。復活してイエスと初めて対面して感激したマリアにもうすगरなくともいいですよ。と、イエスがマリアを慰めている感情なのに触らないようにと訳されている。がっかりしましたが訳す人が直訳をしてこの単語の直接的な単語をもってきたに違いないと思いました。

文章も何回目でも追っても理解できません。すべてページが。で私は結局翻訳する人も理解できないので急ぐあまり直接的な単語をと日本語ですでに英語のカタカナ文字を持ってきたただけだと憶測しました。よく映画や歌の歌詞で直訳と日本語の本当の意味が全く違うこともあります。日本語にしたらこうだというわかりやすい訳にしてほしかったのです。

先生の親切な哲学の本の読み方を学べて更に今度からこんな本が出たら是非また頑張ろうと励まされました。

本当に読書会にいなかったら理解できませんが皆さん先生のお陰で理解できただけでなくこれからこうしたら良いとわかり感激した1日でした。
これからもがんばります。

◆ 【 N2 】

コロナウイルス感染症は 2019 年 12 月初旬に中国の武漢で第一例目の感染者が報告された。日本では 2020 年 1 月 15 日に最初の感染者(中国人旅行者等)が確認された。キリスト教無神論者である作者の「序章 我に触れるな」で始まるこの本は 2020 年 5 月に日本で監修され翻訳発行されている。なんと早く書き上げられたのだろう。

ウイルスは世界中に拡散して感染症患者が溢れ、「我々はみな、同じ船に乗っている。」と

思った人々は、今ではそうではなかったと気づき始めたようだ。下船する人、元から乗船しなかった人もいる。このパンデミックによって二つの対照的な存在が顕著になってきている。エッセンシャルワーカーと自己隔離で感染を避けることのできる人である。コロナウィルスの感染流行が中国の五点掌爆心拳の如く働き、じわりじわりと社会秩序を変化させ政権の破滅をもたらすとこの時に書いているのだが、三年たった今まさに世界中で変化が起こりその脅威が差し迫っていると感じる。

ジジエックは医療の危機、経済の危機、心理的な危機に囲まれているという。資本主義制度であってもウィルスに対処するためには、ワクチン供給や医療機器を国家間で融通し合うように、国際協力や国際協調はもちろん情報を共用し協調して当たる必要があるとされており、これが再考案された「共産主義」であると書いている。世界的な資本主義体制の代表達が感染拡大を容赦なく利用して新しい形の統括を強制しようとしているならどうだろう。どんな社会の形となるのだろうか。災害共産主義に対する災害資本主義。パンデミックで民主主義社会では考えられなかったような措置をとる行政命令によって我々の自由を著しく制限することを許してしまう。そして惨事便乗型資本主義により人命の選択もされる可能性があり生活に対するデジタル管理は永続的な物となり、経済の差は生死の問題に直結するようになる。コロナウィルスの感染拡大は病原菌のウィルス機構、工業化された農業、グローバル経済の急速な発展、文化的習慣、爆発的な国際通信の発達などの集合体とみることできる。この感染拡大の最もあり得る結果は新しい野蛮な資本主義の蔓延である。とも書いている。国家の運営に当たる者達が解決策無く無能を露呈しパニックになっているのを我々が知ってしまった今は五点掌爆心拳が効き始めているのだろうか。われわれはウィルスの世界に生きるすべを身に付け、新しい生き方を構築しなければならないだろうか。

2020年2月に厚労大臣が発表した「37.5度の発熱が4日以上続かなければ受診とPCR検査はできない」「と国民の皆様が思われたのなら誤解です」との2020年5月の会見が思い出される。

◆【 望月悦子 】

久しぶりに難解な本に出会い、若かりし頃の「難しい本は理解できなくても読み通すこと」の言葉を思い出しました。

吉川先生は、本の読み方として特に哲学書などでは章ごとに考えたことをまとめていく。その作業を通して作者は何が言いたいのか分かってくる。とおっしゃってくださいました。

「ウィルスは平等である」なのに「国の行政によって不平等になる」何故なのか。そこから「どう乗り越えて生きていくのか」これらの疑問について読み解いていくと哲学者である著者の言いたいことが分かってくるだろうと願い、再度読み返しながら感想文を書くことにしました。

アメリカのキング博士が半世紀前に「我々はみな、違う船からやってきたかもしれないが、今同じ船になっている」と言っています。

あの当時の違う船は、国家・民族を指していただろうと思われませんが、この言葉から現在はいくらゆる差別化されている現象のことを言い、一方がやられる、もう一方の犠牲は避けられな

い。だからこそ、すべては平等で安定を持たなければならないと示唆しているように考えます。トランプ元大統領の「アメリカファースト」中国・ロシアの現指導者の我が国の国土奪回、国土統一などは、主義思想は曖昧で「我がために」「我さえよければよい」観が拭えないように思えます。

イランのハリルチ副大統領は自身がコロナに感染してからは「このウイルスは民主的で、金持ちも貧乏人、官僚と一般市民を差別しない」と声明に付け加えていることから、体験してみないと理解できないことが多い。また、感染拡大という過去にはあったけれど、今経験したことのない現実においては、人間みなパニックになり不安定になるのは当たり前で、従来の生活に戻すため各国が施行した政策も国の財力・方針(良し悪しは別として)によって、ワクチンの接種さえも不平等な現象が見えています。

そんな中で、ジジェクは「今回のウイルス感染拡大をきっかけに、民族国家を超えた社会、世界的な連携と協力の形で実現する社会について考えさせるウイルスである」また「ウイルスの脅威だけでなく破局的事態(干ばつ、熱波、巨大な台風など)を効率的に世界の協調を打ちたてるといふ難しいが急を要する作業が国家や機関だけではなく、自分自身を管理・自制することにも求められていることを学ばなければならない」さらに「環境破壊について我々人類も知らず知らずの内に、その終焉に加担している」など。

コロナウイルスだけの問題ではなく、広く地球全体で解決策を考えていかねばならないと言及しています。感染拡大の影響を克服するためには、急進的な社会変化が必要だとも言っています。日本でも人との接触を少なくするために、働き方改革として企業ではテレワーク、時差出勤、営業・勤務時間の短縮、教育では対面授業を避けオンライン授業、時差登校(メリット・デメリットは別にして)食の改革としても、安価を求めすぎず輸入に頼らないで自国で生産すること等など世界の人々と共に知恵を出し始めています。

ジジェクはまた「共産主義者とは、自由主義的価値が危機にさらされている理由を真剣に考え、根本的な変化だけがその価値を救えると気づいた自由主義者なのである」と主義主張は偏ったものではなく根本・中庸・中間を見つけ出す知恵を出し合うことが重要であると強調しているのだと思います。

ウイルスや細菌は絶えず存在し、人間の消化機能は腸内の細菌が無ければ維持できないという有用な機能を持っています。であるならばウイルスは敵ではなく共存する相手としてうまく付き合っていくことが求められます。

ジジェクは、パンデミックにならないで、私たちは、「ウイルスの世界」に生きる方法を身に付け、地球上のあらゆる命あるものを阻害するのではなく、共栄共存する新しい生き方を「国境なき医師団」のように、地球のみんなで構築しなければならないと警告しているだと読み解きました。

「難しい」「難しい」と言いながら最後まで読み切った充足感は、脳を活性化させ何だか若返ったよう気がします。こういう機会・ご縁に出会えて感謝です。

◆【 MM 】

読書会で吉川先生から読み方のコツを教えてもらったので試しにやってみる。整理しながら読む。1章から順番に読む。まとめたり、何が言いたかったのか箇条書きやメモをとりながら読む。

・序章 我に触れるな。

新型コロナウイルス感染拡大の只中で、我々は皆、他者に触れるな、自らを隔離せよ、適切な身体的距離を維持せよ、という呼びかけの集中砲火を浴びている。しかし、身体的距離が逆に他者とのつながりの密度を高めるといふ希望がある。

このような精神的な近接の契機は得られるだろうが、今の破壊的状况にどう役立つのか、そこから何か学ぶことがあるのか。

・第1章 我々はみな、同じ舟に乗っている。

感染拡大のパニックを未然に防ぎうるのは、国民と国家の間の相互信頼だけである。一方、今起きている感染拡大が最も純粋な意味での自然の偶然性の結果であり、ただ発生したというだけで、深い意味は隠されていないという事実を受け入れるべきだ。

・第2章 何をこんなに、いつも疲れているのか？

暮らしの中に存在する3つのグループ。疲弊する理由の違い

- ① 西側先進国における自営の自己搾取の労働に携わる人(第一世界?)
- ② 第三世界(西側諸国にも東側諸国にも属さない国々、アジア・アフリカなどの発展途上国)の組立て労働
- ③ あらゆる形の人をケアする労働(医療や介護に携わる人々)

- ① 昇進を動機とする想像力を総動員して独創的な解決策を導く継続的な努力による緊張の疲れ
- ② 繰り返しの作業で疲れる
- ③ 共感を持って働くことが期待され、常に「いい人」でいることの重圧、超過勤務による疲れ

・第3章 欧州のパーフェクトストームに備えて

ヨーロッパで起こっている、起こりうる3つの嵐

- | | | |
|--------------------|---|--|
| ヨーロッパ特有
ではなく世界的 | 【 | ① コロナウイルスの流行の持つ身体的な影響(隔離と苦痛と死) |
| | | ② 経済的な影響 |
| | | ③ プーチンとエルドアン「プートガン」トルコとアサド政権(ロシアから直接の支援を受けている)がシリアで起こしている新しい暴力の嵐 |

流行が移民や難民のせいになされることを未然に防がなくてはならない。そのためには難民に対するヨーロッパの運用上の統一の強化、難民の危機への対応に行動すべきことが必要である。

・第4章 ようこそ、ウイルスの砂漠へ

新型ウイルスの流行が世界の資本主義制度を崩壊すると考える。

様々な破局的事態(ウイルスの脅威、干ばつ、巨大な台風など)に対する正しい解はパニ

ックではなく、効率的な世界の協調を打ち立てる作業である。

市場メカニズムに振り回されない世界的な組織(必要に応じて経済を管理・規制でき、国民国家の主権さえも制限できるような組織)を作ることが必要である。

・第5章 感染流行の五段階モデル

否認→怒り→取引→抑うつ→享受

コロナウイルスの流行に対する我々の反応の最終段階の受容はどのようなものになるだろうか。我々の暮らしの究極の不確実性と無意味さを再認識させるものになるのではないか。

・第6章 イデオロギーのウイルス

※イデオロギー 人間の行動を左右する根本的な物の考え方の体系。観念形態。俗に政治思想。社会思想。

新型ウイルスの拡散に対して新しい壁を作ったりさらに厳しい封鎖をしても、隔離だけでは効果はない。完全な無条件の連帯と世界的に強調した対応(=かくて共産主義と呼ばれたものの新しい形)が必要である。

一方、ダブルスタンダードに対する一般市民の激しい怒りが、コロナ危機に予期しない肯定的な副作用を生む可能性もある。

・第7章 冷静にパニックれ！

パニックは現実の脅威に立ち向かう正しい方法ではない。

新型コロナウイルスに対する適切な反応とはどうあるべきなのか。一国の政府の仕組みをはるかに超えたあらゆる組織を巻き込んだ協調的なアプローチが必要である=(作者のいう)今日必要とされる「共産主義」

・第8章 監視と処罰？ええ、お願いします！

緊急時に課せられる措置は、政府が行政命令によって我々の自由を著しく制限することを許してしまう。人々が国家権力に、何ができるか見せてみろ！と責任を負わせるのが正しいのだ。ヨーロッパに課せられた課題は、中国がしたデジタル化された社会統制よりもっと透明性のある民主的な形でできるものだと証明することである。

・第9章 人の顔をした野蛮が我々の運命か

コロナウイルスは感染拡大の最大の脅威は、人の顔をした野蛮である。

権力者らのメッセージは、社会倫理の基礎を失う覚悟がいるぞ、高齢者と弱者のケアを切り捨てるぞということである。このような「適者生存」の理論を受け入れることは、根本原則すら破壊することになると気づかねばならない。

・第10章 共産主義か野蛮か。それだけだ！

アメリカの権力者の数々の発言に含まれるメッセージは明白だ。人命か、アメリカ的「生活様式」(すなわち資本主義)かという選択である。そして、この選択においては、人命が敗れる。

私は新型コロナウイルスのパンデミックの結果、一種の共産主義が到来するだろうと繰り返し示唆している。

明るい未来の展望ではなく、むしろ「災害資本主義」に対する解毒剤としての「災害共産主義」の視点から、資源や資産の産生と共有のため、何かしらの有効な国際協力を組織しなければならない。